
それは溶けたチョコのように . . .

花月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは溶けたチョコのようだ . . .

【Zコード】

Z3023D

【作者名】

花月

【あらすじ】

幼稚園からの幼馴染で高校3年の朝子や永輝達5人。付き合つている朝子と永輝は幸せな日々を送っていた。しかし、それは突然5人を巻き込みボロボロに崩されてしまつことに . . .

プロローグ（前書き）

永輝サイドです。

プロローグ

例えるならば、それは溶けたチョコのよつたロードロードとした甘い俺
らの関係・・・

俺は朝子をずっと見ていた。朝子も見つめ返してくれた。それは変
わらぬ永遠のものだと想

つた。けど、それは間違った考え方だと教えてくれたのは朝子だった。
俺はいつ何処でお前を見

失ってしまったのだろう。

プロローグ（後書き）

初めて此処で小説を書きます、花月です（・・・）
読みにくい文章ですが、最後まで読んでくれると、とてもありがとうございました。
（。-。）シリアルスジやないも・・・

第一話（前書き）

朝子サイド

第1話

午前6時45分、誰もいないアパートの一室から出る私。誰もいないのは家族がないから。

このことは、また別の話・・・。

私は毎日本を読みにある公園へ行く。大きくなれば小さくもな
く、何處にでもある公園。

表面的な理由は、ただその場所と時間が好きなだけ。でもこれも嘘
ではなく事実。そして本当

の理由はまだ誰にも行つたことが無い、ていつか絶対言わない。

やつと公園に着いたのが7時8分。私は近くにある小さなベンチに
腰掛け、一息吐く。何しろ

ここまで歩いてくるのは苦いと言ふと疲れる。

——パラパラ

私は最近はまつていい本を開いた。特別有名でもない本。でも趣味
にあつから好きな本。それ

から鞄から眼鏡を取り出し、かけて読んだ。それから何分たつたの
だろう、私はすっかり本に

夢中になっていた。そんな状態でいきなり背後から肩を誰かに触られた。でも私は驚かない。

そのことは毎日起こりしているし、誰だかもわかる。言えばお決まりのこと。私は本を閉じ、

一応振り返った。後ろには勿論彼がいた。

「はよ。」

彼はそつけない挨拶をした。私はとことうとくすっと笑って返した。

「おはよう、永輝。」

「な、何だよ、気持ち悪いな。笑うなよ。」

永輝は少し顔を赤らめて言った。それを見てさらに笑う。あまりにも素直な反応に本当に同じ

年なのかと時々思つ。でもそんな永輝に愛しさがあるのも事実。

「フフ、別に何でもないけど。」

「嘘つけ、まだ笑ってるじゃねえかよ……。何がおかしい?」

「いやただ可愛いなあって思つただけ。」

「か、可愛いってからかってんじゃねえぞ。」

私が公園へ行く本当の理由。それは・・・少しでも永輝といたいから。毎日公園に通つてゐる

て言つたら迎えに来てくれるよつになつた永輝。それはひとつも嬉しかつた。また永輝と共有

できる時間ができると思つた。子供っぽいと言つてからかつてゐるけど、本当に子供っぽ

いのは私。それでも愛を確かめ合つてゐるなら、それでもいいと思つてゐる。この生活がずっと続くと思つていたから・・・。

第2話（前書き）

永輝サイド

「ほら、行くぞ。」

俺はいつものように手を差し出した。朝子はまた微笑みながら俺の手を握ってきた。

「お前、今日笑いすぎじゃねえ？ 何かあつたのか？」

いつものことなのに少し焦ってしまう俺。それを『まかす』よつになぜなのかとまた聞く。

「だから、永輝が可愛いなあつと思つて。何回も言わせないでよ。」

これでも結構顔に出るタイプなんだからつと付け加えた。それは意外だった。こいつは、学校

ではクール美人で有名、おまけに頭脳明晰。とてもではないが並大抵の男子が近づけるような

女子ではなかつた。なのに、当の本人がこんな事いうなんて、中身はやっぱり普通の女子なの

だと思った。そんなわゆるギャップを持ち合わせている彼女に惹かれている俺。

「お前のほうが可愛いから。」

朝子は、いきなりの俺からの発言にほんのり頬がピンクになった。
しかしそれも一瞬で、次の

瞬間にには元通りになり、皮肉を言い放った。しかも微笑みながら。

「永輝には負けるよ。」

俺はこんなことを繰り返してはきりが無いと思い、話題を変えようとする。不意に公園の時計

台が目に入った。時刻は遅刻寸前……。

「おい……やべー、遅刻すんぞ……！」

俺は朝子の手を握り締め、急いで公園から駆け出した。全速力で。
頑張つて朝子も着いてこよ

うとする。俺たちは、これから思いもよらない事件が待ち構えている今日と、いつ日に向かって

走っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3023d/>

それは溶けたチョコのように . . .

2011年1月29日02時27分発行